

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380257

研究課題名(和文) ワルラス企業者論の解明 純粋・社会・応用経済学の観点から

研究課題名(英文) Walras's Zero-Profit Entrepreneur- In the Light of his Pure, Social and Applied Economics

研究代表者

御崎 加代子 (MISAKI, Kayoko)

滋賀大学・経済学部・教授

研究者番号：90242362

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ワルラスの企業者論の真の意図と歴史的意義を、純粋経済学(一般均衡理論)のみならず、社会経済学、応用経済学における議論にも注目することにより、解明した。

ワルラスの純粋経済学においては、企業者利潤は均衡状態においてゼロとなる。この非現実的な仮定は多くの経済学者たちから批判されてきたが、これまであまり注目されてこなかったワルラスの社会経済学・応用経済学において展開されている企業者国家論が、この企業者利潤ゼロの理論に基づいていることを示した。これにより、ワルラスのマルクス批判、シャルル・ジッドの利潤概念との相違、ワルラス労働市場観の形成過程と労働政策の真の意図についても明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies the real implication of Walras's concept of the zero-profit entrepreneur by focusing on not only his writings about pure economics but also his writings about social and applied economics. In Walras's pure economics, in the state of equilibrium an entrepreneur is supposed to earn no profit. This unrealistic assumption has been questioned by many economists. I examine Walras's explanation of the state entrepreneur in his social and applied economics as based on his concept of entrepreneurship in pure economics and how Walras used the state entrepreneur to demonstrate the difference between his collectivist plan and that of Karl Marx. I also show how Walras's opinion about entrepreneurship also differed from that of Charles Gide, who insisted on profit abolition, and how Walras's concept of labor market was developed based on his idea of the zero-profit entrepreneur to support his labor policy.

研究分野：経済学史

キーワード：ワルラス 一般均衡理論 企業者 マルクス 労働市場 シャルル・ジッド 集産主義 利潤

1. 研究開始当初の背景

レオン・ワルラスが創設した一般均衡理論は、現代経済学の出発点として高い評価を受け、そこに登場する企業者概念については、均衡状態においてその収入である利潤がゼロになるという仮定を置いているために、あまりにも非現実的であると多くの経済学者たちから批判されてきた。

20世紀になって、例えばシュンペーターはその概念により現実性をあたえるべく、新結合の主体としての企業者を導入することによって、ワルラス理論を動態理論として発展させていった。

また森嶋通夫のワルラス解釈は、ワルラスの企業者が資本家と同一視されているとみなし、両者を独立に意思決定をする主体に発展させることによって、貯蓄と投資の独立性を仮定するケインズモデルへの橋渡しを示唆した。いずれもワルラス企業者概念を未成熟なものとして否定的にとらえ、より現実整合的に発展させようとする解釈である。このような解釈に共通するのは、ワルラスの純粋経済学のみならず、社会経済学と応用経済学は全く無視をしているという点である。

一方、ワルラス自身のモデルに存在する謎の部分に、理論的一貫性を求めて、後世の理論経済学者たちが補充をすればするほど、ワルラスの意図からは離れて行ってしまおうという状況が現在指摘されている。このような状況を打破するには、ワルラスの当初の意図にしたがって、純粋経済学(一般均衡理論)・社会経済学・応用経済学の3つを統合的に理解することが求められる。

ワルラスが理念的世界と考える純粋経済学とは対照的に、現実における正義の問題を扱う社会経済学、効率性を基準に現実の経済政策を提言する応用経済学において、企業者は極めて現実的な存在として登場する。たとえば、国家が企業者機能を担うという主張は所々で見られ、この主張は同時代の経済学者

たちとの政策論争や、マルクスをはじめとする社会主義者たちへワルラスが行った批判とも大いに関連しており、ワルラス一般均衡理論の真の意図を歴史的、思想的に解明する大きな手掛かりとなる。

2. 研究の目的

レオン・ワルラスの純粋経済学に登場する企業者は、均衡状態においては受け取る利潤がゼロとなることが仮定され、ワルラス・モデルの非現実性を示す象徴として、よく知られている。一方、社会経済学・応用経済学においては、国家がこの企業者機能を担うことが主張されるなど、極めて現実性を帯びた企業者論が展開されているのであるが、その詳細な検討はこれまでほとんどなされていない。

本研究の目的は、ワルラスの企業者概念について、これまで研究が集中してきた純粋経済学の観点からのみならず、社会経済学・応用経済学に登場する企業者概念の解明に重点をおき、ワルラス企業者論の全貌を示すことであり、ワルラス経済学の制度的枠組とその真の意図を解明することである。

3. 研究の方法

(1) ワルラスが、純粋経済学における企業者利潤ゼロの仮定をそのまま、現実で実現しようとしていたわけではないことを、青年時代の協同組合運動に関する論文や同時代の社会主義者たちとの書簡等を手掛かりに示す。そのうえで、社会経済学における企業者概念の全容とその意義を、マルクスや他の社会主義者たちへの批判をもとに、解明する。『社会経済学研究』におけるマルクス批判はワルラスの企業者国家論が展開される主要な部分である。ワルラスがマルクスをどのように読んでいたのか、ローザンヌ大学ワルラス文庫の調査も含めて、詳細に検討する。

(2) ワルラス応用経済学における企業者概

念の全容とその意義を、当時の自由主義経済学者たちとの競争をめぐる論争をもとに、解明する。この部分は、ワルラス自身が純粋経済学と現実経済との関係をどのようにとらえていたのか、直接的に示す部分であり、本研究の締めくくりとなる。

いずれもワルラスが生前に公刊した著作のみならず、草稿、講義録、メモ類（ワルラス著作全集に所収されている）、そしてワルラスの蔵書とそこへの書き込み（ローザンヌ大学ワルラス文庫の調査）が重要な手掛かりになる。

4. 研究成果

(1) ワルラスの企業者国家論とマルクス批判の意図

ワルラスは『純粋経済学要論』における企業者利潤ゼロのモデルに基づき、社会経済学、応用経済学において、企業者国家論を展開した。ワルラスが『社会経済学研究』所収の「所有の理論」（1896）において行ったマルクス批判は、その文脈で理解すべきであることを示した。

ワルラスは、マルクスの体制と自らが構想する企業者国家ともに「集産主義」して分類し、その違いを批判的に考察している。すなわち、マルクスとワルラスとの対立を、労働価値論や資本主義批判を軸に説明する従来の教科書的な解釈からは、全く予想もつかない批判をワルラス自身は行っていたのである。ワルラスは、純粋・社会・応用経済学という三位一体の経済学体系によって、公正と効率の両立という極めて現代的な問題意識をもっており、マルクス批判もその観点からなされていることを示した。

(2) 純粋経済学の企業者利潤ゼロをめぐるシャルル・ジッドとの論争

マルクス批判に加えて、ワルラスは企業者利潤をめぐる友人のシャルル・ジッドとも対立している。ジッドはワルラスの純粋経済

学のみならず社会経済学にも理解を寄せた数少ない同時代人の一人であるが、利潤の考え方をめぐってワルラスが激しい批判をしていることが、2000年に公刊されたワルラスのメモから判明した。

利潤の廃止を主張するジッドに対して、ワルラスは、現実経済において利潤は労働者に資本家になる手段を与えるのであり、廃止すべきではないことを主張している。労働者が資本家になることを促進するという考え方はワルラスが青年時代に協同組合運動に参加していた時に主張していた考え方であるが、ワルラスが生涯この考えを曲げていないことをこのメモ等の分析により明らかにした。

(3) ワルラス企業者論を軸とした労働市場観の形成過程と応用経済学における労働政策の真の意図

ワルラスは賃金の決定を自由競争に任せすることを主張し、ストライキには反対した。このことから、ワルラスは新古典派的な労働市場観の元祖として誤解をうけがちである。しかしながら、企業者概念を軸に、ワルラスの労働市場の形成過程をたどっていくと、主に応用経済学の分野で展開される労働政策の真の意図を明らかにすることができた。ここでも効率と公正の両立というワルラスの理念が重要な鍵を握るのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

御崎加代子

「ワルラスのマルクス批判 - 企業者国家論を中心に - 」『滋賀大学経済学部研究年報』vol.22, 2015, pp.27-35.

査読無

<http://libdspace.biwako.shiga-u.ac.jp/dspace/handle/10441/14529>

〔学会発表〕(計3件)

御崎加代子「ワルラスのマルクス批判」
経済学史学会 第78回全国大会 (2014
年5月24・25日 立教大学)

Kayoko MISAKI, “The Real Implication
of Walras’ s Zero-Profit
Entrepreneur”, Colloque
international, "Contre Walras", Paris,
les 25-26 septembre 2015.

Kayoko MISAKI, “Léon Walras’ Concept
of Labor Market in his Pure, Social, and
Applied Economics”, The Wage Workshop,
Theoretical, Empirical and Historical
Perspective on Wage, Subsistence and Basic
Income, Centre Walras-Pareto, University
of Lausanne, 29-30 September 2016.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<https://kayokomisaki.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

御崎 加代子 (MISAKI, Kayoko)
滋賀大学・経済学部・教授
研究者番号: 90242362

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号:

(4)研究協力者

()